

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：32305

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26861881

研究課題名(和文) がんを持つ母親と思春期女子の対話を基盤にした支援モデルの開発と評価

研究課題名(英文) Development and evaluation of the support model based on a dialogue of a mother with cancer and a pubescent girl

研究代表者

藤本 桂子 (Fujimoto, Keiko)

高崎健康福祉大学・保健医療学部・講師

研究者番号：80709238

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：Stage : 乳がんを持つ母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝えることへの困難感と対処法および支援ニーズの明確化1. 研究対象者：A病院で初期治療を受けた乳がん患者及びその子ども15名. 2. データ収集方法：(1)半構成的面接(2)診療録調査方法3. 分析方法：クリッペンドルフの内容分析
Stage : がん患者と子どものオープンなコミュニケーションに欠かせない要素の明確化1. 対象文献：Web版医学中央雑誌及びPub Medを使用し，“がん”“子ども”“親”をキーワードとして原著論文の検索2. 研究方法：得られた論文から，告知を受けたがん患者が病気に伴う情報を子どもに伝える現象や支援ニーズの構成要素を抽出

研究成果の概要(英文)：Stage1: Difficult feeling and clarification of dealing and support needs to a mother's with breast cancer handing information with sickness down to a pubescent girl 1. Subject of research person: The breast cancer patient who had an early stage medical treatment at A hospital and the 15 children. 2. Data collection method: (1) half architectonic interview (2) medical examination and treatment roku investigation method 3. Analysis method: Content analysis of Krippendorff
Stage11: Clarification of an element necessary to the communication with which a cancer patient and a child are open 1. The search which uses target document :Web edition medical central magazine and Pub Med, and it's an original paper with "cancer" "child" "parent" as the keyword 2. Study method: A component of the phenomenon and the support needs from which the cancer patient who received an announcement introduces information with sickness to a child is picked out from a obtained thesis.

研究分野：がん看護学

キーワード：がん 思春期

1. 研究開始当初の背景

思春期女子を持つ乳がん患者を取り巻く現状

今や乳がんは、日本人女性の18人に1人が罹るがんであり(独立行政法人国立がん研究センターがん対策情報センターがん情報サービス)、生活の欧米化に伴う食生活の変化や女性の社会進出の増加により、今後さらに患者数の増加が予想される。また、罹患率は30代から増加し、近年の日本において、30代から40代の患者には中高校生いわゆる思春期の子どもを持つ女性が多いことが推察される(一般財団法人厚生労働統計協会)。

思春期にある子どもの特徴として、精神的・身体的に親からの自立心が芽生え、物理的・心理的にも親との距離を取り始める時期である。また、乳がんの遺伝性により、乳がんの告知を受けた母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝えることは非常に困難になっている。

そのような母親が病気に伴う情報を子どもに伝え、オープンなコミュニケーションをとることは、安心して治療を受ける環境づくりの第一歩である。欧米諸国で開発が進められている教材や支援モデルをそのまま日本の家族関係に適用させることはできず、これらを改善し、世界に通用する支援モデルの開発が急務である。

2. 研究の目的

本研究で明らかにする点を段階毎に示すと以下のとおりである。

【平成26年度】

Stage : 乳がんを持つ母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝えることへの困難感と対処法および支援ニーズ

Stage : 文献検討によるがん患者と子どものオープンなコミュニケーションに欠かれない要素

【平成27年度】

Stage : 支援モデルの概要・臨床的適合性

【平成28年度】

Stage : 支援モデルの効果・評価視点

1) Talking with your children about breast : Breast Cancer Care : http://www.breastcancercare.org.uk/upload/pdf/talking_to_your_children_about_breast_cancer_0.pdf (2012.12.1)

2) Shands ME, Lewis FM, Zahlis EH. Mother and child interactions about the mother's breast cancer: an interview study. *Oncology nursing forum* 2000 ; 27(1) : 77-85

3) Barnes J, Kroll L, Burke O, Lee J, Jones A, Stein A. Qualitative interview study of communication between parents and children about maternal breast cancer. *The Western Journal of Medicine* 2000 ; 173(6) : 385-389

4) 根本秀美. 進行乳がん罹患した母親の子どもへの告知とその反応. *臨床死生学* 2005 ; 10 : 18-27

5) 内山美枝子, 青山友香里. 若年性乳がん体験者のライフストーリーからみる治療過程における『子の存在』の意味づけ. *日本看護学会論文集 母性看護* 2011 ; 41 : 126-129

3. 研究の方法

本研究では、乳がんを持つ母親と思春期女子のオープンなコミュニケーションを基盤にした支援モデルの開発と評価を実施するため、以下の4段階の研究を実施する。

Stage : 乳がんを持つ母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝えることへの困難感と対処法および支援ニーズの明確化を図る。

Stage : 文献検討によりがん患者と子どものオープンなコミュニケーションに欠かれない要素を明確化する。また、Stage で得られた結果を加え、支援モデルの原案を開発する。

Stage : 支援モデルを実践する。

Stage : 支援モデルの効果・臨床的適合性を判断する。

1. 研究目的を達成するための具体的な研究計画・方法

全ての段階においてがん看護及び質的研究に精通した研究者数名にスーパーバイズを受ける。

【平成26年度の計画】

Stage : 乳がんを持つ母親が病気に伴う情報を思春期女子に伝えることへの困難感と対処法および支援ニーズの明確化を図る。

1. 用語の定義

(1) 思春期: 対象者自身に養育されている中学1年生から高校3年生の子ども。

(2) 病気に伴う情報: 病名使用の有無に関わらず病気、初期治療(手術・術前化学療法)、乳がんの遺伝および治療に伴う生活の変化などを含む情報。

2. 研究対象者

A 病院で乳がんの初期治療を受け、初期治療開始時に思春期女子を養育していた者15名及びその子ども15名。

3. データ収集方法

(1) 半構成的面接: 回数は一人1~2回、時間は30分から1時間程度。診断を受けてから現在までの出来事や気持ちについて、半構成的面接を行う。面接内容は許可を得てICレコーダーに録音し、得られたデータから逐語録を作成する。

(2) 診療録調査方法: 同意を得た患者の診療録から、患者の基本属性と疾患及び治療経過に関する情報を収集する。

4. データ収集までの手続き

まず、研究実施場所の責任者に文書及び口頭で説明を行い協力を依頼する(病院倫理審査委員会承認済)。患者の診療終了後、担当医師に研究者の紹介と研究の主旨を説明してもらい、同意が得られた患者に対し研究者

が文書及び口頭にて研究目的・方法などの説明を行う。同意が得られたら同意書に署名を頂き、対象者と相談の上決定した日時に面接を実施する。

5. 倫理的配慮

ヘルシンキ宣言の精神と、厚生労働省による臨床研究に関する倫理指針を遵守し、面接及び介入はプライバシーが確保できる個室で行う。面接内容の録音は研究対象者の了承が得られた場合のみ行い、得られた録音データや個人情報は匿名性を保証するため番号によって識別し、研究中断や終了後には速やかに削除する。研究成果を報告、公表する際にも、個人が特定できないよう研究施設名の公表も行わない。対象者には研究の目的・方法、自由意思による参加などについて文書及び口頭にて説明し、書面にて同意を得る。なお、全ての研究過程においてその内容を研究施設における倫理審査委員会に提出し、承認されるまでは研究には一切着手しないこととする。

6. 分析方法

Klaus Krippendorff の内容分析の手法を用い、質的帰納的に分析する。

Stage : 文献検討によるがん患者と子どものオープンなコミュニケーションに欠かせない要素を明確化する。また、Stage で得られた結果を加え、支援モデルの原案を開発する。

1. 対象文献: Web 版医学中央雑誌及び Pub Med を使用し、“がん”“子ども”“親”をキーワードとして原著論文の検索を行う。

2. 研究方法

1) 得られた論文から、告知を受けたがん患者が病気に伴う情報を子どもに伝える現象や支援ニーズの構成要素を抽出し、必要な要素を Stage の結果に追加する。また、抽出された必要な要素を Stage の結果に追加する。

2) 支援モデルの概念枠組み、構成要素、構成要素の操作的定義を行い、支援モデルの構成要素を時系列で示す。また、がんを持つ母親への支援に精通する研究者と共に妥当性の検討を行い、支援モデルの原案とする。

【平成 27 年度の計画】

Stage : 支援モデルの概要を実践する。

研究方法: 原案支援モデルに基づき、支援モデルを試行する。コントロール群 10 名は今までの方法を用い、介入群 10 名は支援モデルを用いる。

【平成 28 年度の計画】

Stage : 支援モデルの効果・臨床的適合性を判断する。

研究方法: 原案モデルに基づき、施行した支援の有効性を評価し、有効性の高い支援モデルの開発を行う。評価視点は、「家族の親密性を高める介入」「自己効力感を高める介入」「思春期のアセスメントと伝え方への教育的介入」「情緒的支援としての傾聴」などを

検討する。また、面接により「自己効力感」や「夫婦間の伝え方の合意」などを含む主観的評価を行い、「VAS」「自己効力感」などの尺度を用いた客観的評価も参考とする。

2. 本研究を遂行する上での具体的な工夫

1) がん看護を専門とする修士号以上の複数の看護師に研究協力者として依頼する。

2) 1) の上で、研究代表者・研究分担者・研究協力者の研究活動内容と優先順位を整理し、相互の活動を促進する連携体制と分担を検討し取り組んでいく。

3) 研究の精度を重視しながら研究方法の効率化を図ることができるよう、専門家から指導を受ける時期や回数増加を検討し、研究の進捗状況に応じた適切な指導を受けることができるよう、焦点を絞り依頼するなどの努力を続け進めていく。

4) 研究実施施設のがん相談や乳腺専門外来を通し、初発乳がん患者の日常的ニーズの把握を行う。

5) 研究遂行が困難な場合、研究施設の検討を行い、同等と考えられる施設を検討していくなどを行う。

3. 研究体制

本研究を実施するにあたり、以下のメンバーにより協力を得ることとする。

神田 清子: 群馬大学大学院保健学研究科(看護師・教授)研究計画助言, 現象と支援ニーズの把握への助言, 支援モデル開発への助言

廣河原 陽子: 群馬大学医学部附属病院(がん看護専門看護師)研究計画助言, 現象と支援ニーズ把握への助言, 支援モデル開発への助言

4. 研究成果

「乳がん患者を親に持つ思春期女子の体験」(第 32 回日本がん看護学会学術集会にて発表済み)

【目的】

近年、「遺伝性乳がん」という言葉が広く知られるようになり、「親からの自立心」という特徴を持つ思春期の子どもと乳がん患者がオープンなコミュニケーションを取ることが非常に困難になっている。そこで本研究の目的は、乳がん患者を親に持つ思春期女子が診断から初期治療までに体験する内容を明らかにし、必要な看護支援の示唆を得ることである。

【方法】

対象者は、患者の診断・告知時に中学生または高校生であった女子 9 名。「母親のがんを知った時から初期治療までに体験したこと」について、半構成的面接法によりデータ収集を行った。分析は Krippendorff の手法により質的帰納的分析を行った。

【結果】

対象者 9 名の平均年齢は 17.6 ± 1.51 歳、告知時の発達段階は中学生 3 名、高校生 6 名であった。初期治療開始からの平均期間は平

均 23.3±9.35 カ月であった。乳がん患者を親に持つ思春期女子の体験は、【母から伝えられる病気の情報】【母のがん罹患により生じる気持ちの揺らぎ】【母や家族の思いを推察】【がん情報の獲得行動】【家族や友人、親戚からのサポート】【母のがん罹患に対する自分なりの意味づけ】【母の治療と自分の生活を調整】【母のがんを通して起こる知識・考え・行動の変化】【がんに対して持つ多様なイメージ】【罹患後に影響を与える知識と環境】の10の大表題に集約された。

【考察】

乳がん患者を親に持つ思春期女子は、母から病気の情報を伝えられることにより気持ちの揺らぎや家族の思いの推察を体験する。しかし、情報の獲得や周囲の人々のサポートにより母のがん罹患に対する自分なりの意味づけを行い、生活の調整や知識・考え・行動の変化を起こすことが明らかになった。これらの体験を十分理解した上で、それぞれの家族がありのままの姿を保ちながら、それぞれの発達課題を遂げられるよう支援することが必要であり、母親である患者が安心して治療に受けるためにも重要な支援である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

藤本 桂子、神田 清子、乳がん患者を親に持つ思春期女子の体験、日本がん看護学会、2017

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤本 桂子 (Fujimoto Keiko)

高崎健康福祉大学・保健医療学部・講師

研究者番号：80709238